

オグリキャップ

日本でいちばん愛された馬

江面弘也

誕生
40周年
オグリ
キャップ

うれしそうに話す
武豊は、すこし
間を置いて言った。

「みんな、
オグリキャップが
好きですからね」

(本文より)

オグリキャップとその関係者達を現役当時から取材し、『**優駿**』
『**Number**』などで名記事を執筆した江面弘也が贈る、
珠玉のオグリキャップ・ノンフィクション。

オグリキャップ

日本でいちばん愛された馬

江面弘也

星海社

359



SEIKAISHA
SHINSHO

〈凡例〉

馬の年齢は現在の表記に統一し、レース名は当時のままとした。また、登場人物の敬称は略させていただいた。

はじめに 日本競馬のいちばんしあわせな日

いまもむかしも、競馬場に行く電車のなかで『サンケイスポーツ』紙を読んでいる。競馬評論家として好きだった大橋巨泉きよせんのコラムが載っていた『競馬エイト』を買っていたわたしは、大橋が競馬評論を引退してからは「馬柱」うまばしら（成績欄）がおなじサンスポを利用するようになったのだ。もうひとつ、サンスポの「馬柱」のなによりもいいところは、出走馬に生産牧場が記載されていることだ。生産牧場は馬券には直接影響しないが、競馬に関わる仕事をしている人間にはありがたい。

あの有馬記念の朝も駅でサンスポを買った。当時、競馬雑誌『優駿』の編集者だったわたしは、仕事で付き合いのある高橋源一郎のコラム「こんなにはずれちゃダメかしら」を愛読していた。高橋の本命はホワイトストーンだった。菊花賞はメジロマックイーンに屈して二着だったが、果敢に挑戦したジャパンカップでは四着に頑張っていた。外国の強豪を相手に日本馬として最先着である。ホワイトストーンは、タマモクロス、オグリキャッ

プとつづいてきた芦毛の時代を引き継いでいくのはこの馬に違いないと、多くのファンが期待を寄せていた馬である。ファンタストやブロケード、キョウエイプロミスなどを送りだしてきた高松邦男厩舎で、主戦騎手が柴田政人^{まさと}ということもあって、とりわけ関東のファンに人気が高かった。

高橋の対抗はメジロアルダンだった。二年前、『優雅で感傷的な日本野球』で第一回三島由紀夫賞を受賞したときに、「賞金の一〇〇万円はどうしますか」という記者の問いにたいして、「ぜんぶダービーのメジロアルダンの単勝につきこみます」と口走ってしまい、結果、首差で二着に負けた馬だ。▲は「いまでも四歳（現在の三歳）最強と信じている」というメジロライアンで、天皇賞でもジャパンカップでも◎にしていたオグリキャップには、悩んだ末に、はじめて付けるといふ♡印にした高橋は、馬券はオグリキャップの単・複だけを買うつもりで、ほかの馬券は買わないと書いていた。♡印はロマンチックな感情というより、宝塚記念で引退すべきだったのに人の思惑で走らされ、負けつづける名馬への敬意の表れだという高橋は、こうつづけた。

〈わたしは、武豊はおそらく三コーナーで一度は先頭に立たせるのではないかと予想し

ております。その後は馬群に沈むにせよ、その瞬間は「オグリ！」と叫びたいと思っています。〽

不覚にもわたしは電車のなかで涙しそうになった。「馬群に沈むにせよ、その瞬間は『オグリ！』と叫びたいと思っています」というのは、多くのオグリキャップファンの心境を代弁していたからだ。

しかし、わたしはオグリキャップの馬券を買うつもりはなかった。この有馬記念は、高橋のようにオグリキャップの単勝だけを買うか、まったく買わないかの二択だと思っていた。中途半端に買うのはオグリにたいして失礼だ。わたしは買わないほうを選んだ。

岐阜県の笠松競馬場から中央入りして三年間、数々の感動的な走りを見せてくれたオグリキャップだが、この年の秋は怪我から立ち直りきれないまま走り、天皇賞（秋）六着、ジャパンカップにいたっては一一着とデビュー以来もっともひどい着順だった。

オグリキャップは終わった――。

そんな声が大勢を占めていたあの秋、オグリキャップを愛した人たちは皆複雑な思いをいだいていた。天皇賞、ジャパンカップと無残な負けがつづいてもまだ走らせるのかと、

批判の矢面に立たされた瀬戸口勉せとぐちつとむ 調教師のもとには抗議の手紙や電話がいくつもあったという。そして、引退レースとなる有馬記念もまた喘ぐように後退していくだろうオグリキヤップに、わたしたちはどう対処すればいいのか――。みんなが考え、模索していた。スポーツ紙や予想紙の印だけを見れば、オグリキヤップは端役の一頭でしかない。それでもファンの思いがこもった「最後の一票」が四番人気まで押しあげていた。

一九九〇年十一月、中山競馬場のあたらしいスタンドが完成した。ふるいスタンドが建てられたのは一九五六年、第一回有馬記念（当時の名称は中山グランプリ）が開催された年だ。銀色の大屋根が目を引くスタンドは開放的で見やすかった。パドックから窓口、そしてスタンドへと、ファンが動きやすい、いいスタンドだった。ただ、年末はスタンドを吹き抜ける風が冷たく、有馬記念は寒さにふるえながら見ていたものだ。

それにたいして、それまでの競馬場とはかけ離れたきらびやかな新スタンドは、「ラブホテルと間違えた車もあった」というような笑い話もあったほどで、いかにもバブルの絶頂期を思わせる建物だった。地下一階（競馬場に地下ができたのはじめてだった）、ゴンドラを含めて地上六階建てで、冷暖房が完備され、三、四階の指定席エリアは総ガラス張りになっ

た。スタンドのなかにいれば、寒さを感じないで過ごせる。

オグリキャップが出走した過去二年はスタンドの改修事中だったことで八万五〇〇〇枚の前売り入場券を発売して入場制限をしてきたが、新スタンドの完成によって入場制限が解除され、この年の有馬記念は一七万七七七九人もの入場者があった。それまでの中山競馬場の最多入場者は、スピードシンボリが勝った一九六九年の有馬記念で一三万七八八人である。それを約四万七〇〇〇人も上まわる、空前絶後の中山競馬場の最多入場者である。あまりにも多くの人が押し寄せたために、入場門でも入場制限しなければいけないほどだった。

それだけの人が入場した競馬場は大混乱だった。新スタンドの一部は前年の秋に完成していたが、まだ不慣れなファンも多く、どこになにがあるのかわからない。可能収容人員は一六万五〇〇〇人ということだったが、機能よりもデザインが優先されるのもバブル期の建造物の特徴で、競馬ファンの流れを無視したようにつくられた細長い（ひとりしか乗れない）エスカレーターも混乱に拍車をかけていた。『おとなの迷子』も続出するほどで、自由席の客はパドックを見てから馬券を買うなど悠長なことは言ってられない。それほどだったから、『優勝』では翌年の皐月賞前には「中山競馬場新スタンドの歩き方」なる記事ま

で掲載している。

一階の立ち見席には有馬記念の何レースも前から群衆がひしめいていた。その寒さを感じる隙もないほどの人で埋まっていたなかにわたしとライターの友人もいた。馬券は早めに前売りで買っていたが、ふたりともオグリキャップ絡みの馬券は一〇〇円も買っていない。わたしは、逃げるオサイチジョージと、クラシックでもずっと馬券を買っていたホワイストーンは入れていたと思うが、ほかはなにを買ったのか覚えていない。わたしたちは有馬記念の何レースも前からスタンドに立ち、隙を見つけてはできるだけ柵に近づこうとするのだが、まったく前には行けず、背伸びしながらターフビジョン（場内にある大型映像ディスプレイ）を眺めるしかできなかった。

ほんとうはメディア席でパドックを見て、関係者がいるエリアでレースを見れば楽し、取材者としてはそうすべきなのだろう。しかし、まだ若いわたしたちはゴンドラから見下ろしている記者とは違うんだと尖っていたこともあるのだが、どうしてもきょうは一階立ち見席で見ないといけないというのがふたりの一致した考えだった。高橋源一郎ふうに書けば「オグリキャップへの敬意」であり、高橋とおなじように最後に「オグリ！」と叫ぶためである。いや、もう時効だから正直に書こう。ほんとうは、オグリキャップは勝てな

いと思っていたわたしたちは、オグリコールがおきるとすれば本馬場入場のときしかない
と思っていた。そして、コールがおきなければ、おれたちがおこそうという、不謹慎なこ
とも考えていた。そのために入場してくる馬をすこしでも近くで見られる場所に陣取っ
ていたのだ。

そんな状況でレースを待っていたから、実際のスタンド内の混乱の状況も、パドックで
馬たちがどんな雰囲気歩いていたのかも、まったく知らない。ただ、じつと、ターフビ
ジョンの映像を見ながら待っていた。

そして、ようやく場内に音楽が流れ、誘導馬に導かれて一六頭の出走馬が馬場にはいっ
てくる。大歓声が沸き上がる。四枠八番のオグリキャップがダートコースに姿を見せると、
さらに大きな歓声が起き、そのまま芝コースにはいつてくる。「オグリ!」「オグリ!」。わ
たしたちが叫ぶ。当然、ついてくる者などいない。そのときだった。突然、後頭部を殴ら
れるような衝撃波を受けた。場内アナウンスでホワイトストーンが紹介されたのだ。この
日もっとも大きな歓声でスタンドのファンに迎えられたのはオグリキャップではなく、一
番人気の若い芦毛だった。ああ、そうだな、とわたしは現実を知る。きょうのメインは
オグリキャップの引退レースではなく、有馬記念なのだ。その主役はホワイトストーンな

のだ――。

その直後、スタンドがどよめいた。なんだろうと思っていると、本馬場入場の歓声に驚いたヤエノムテキが岡部幸雄^{ゆきお}を振り落として放馬してしまったのだ。二年前にオグリキャップを有馬記念優勝に導いた名手も制御できないほど馬が興奮する空気があのと時の中山競馬場をつつんでいた。ヤエノムテキは早めにつかまえられて、無事に出走できたのがさいわいだった。

午後三時二五分。四年前にあたらしくなったファンファーレが鳴りオグリキャップ最後のレースは静かにはじまった。予想どおりにオサイチジョージが先頭を奪うとゆつくりと最初の四コーナーをまわる。一周めのスタンド前では遅い流れと大歓声にリズムを乱す馬もいたが、オグリキャップは中団の外を走って行く。そのまま大きな動きもなく、馬たちは一、二コーナーをまわっていく。ペースはひどく遅かった。

スタンドを埋めたファンがざわざわしだしたのは向こう正面をすぎたあたりだったろうか。「オグリだー」と友人が言う。「いい感じだ」。うまく流れに乗っていたオグリキャップが外から差を詰めていくのがターフビジョンで確認できた。見慣れた勝負服と芦毛がターフビジョンに映るたびにどよめきが起き、それがしだいに大きくなっていく。そして、高

橋源一郎が予想したように、二周めの三コーナーをまわったところでオグリキャップが先頭に並びかけていった。

わたしはそのあたりからレースの記憶がない。ターフビジョンの映像が上下に揺れていた。それを見る目も曇り、なにがなんだかわからなくなり、気がついたときには友人と一緒にオグリオグリと叫んでいた。

武豊を背にしたオグリキャップがスタンド前に戻ってくると、うねるようなオグリコールが幾重にも重なり、スタンドをつつんでいく。馬券を取った人も負けた人も、だれもが飛び跳ね、新聞を振りあげ、声のかぎりにオグリオグリと叫んでいた。『スポ根』映画のラストシーンのようなことが現実におきたとき、そしてそれを目の当たりにしたとき、人は舞いあがりおかしくなる。

あの日、一九九〇年一月二三日は「日本競馬のいちばんしあわせな日」だった——。狂騒の渦のなかで声をあげていたひとりとして思う。

目次

はじめに 日本競馬のいちばんしあわせな日 3

第一章 繋がれた血 17

稲葉不奈男牧場 18

ホワイトナルビー 21

「灰色の幽霊」の血 32

第二章

笠松競馬場

37

鷲見昌勇厩舎へ 38

笠松の天才騎手 45

ターニングポイント 50

第三章

幻のダービー馬

55

佐橋五十雄という馬主 56

中央デビュー 61

快進撃 67

第四章

芦毛対決 77

タマモクロス 78

決戦の前 83

MATCH 1 天皇賞(秋) 90

MATCH 2 ジャパンカップ 98

MATCH 3 有馬記念 105

第五章

暗転 117

再トレード 118

はじめての故障 123

あらたなライバル 128

第六章

炎の秋六戦

135

競馬ブームのはじまり

136

三強か、四強か

147

連闘の是非

159

オグリキャップ、頑張れ！

165

雨のグランプリ

173

第七章

苦悩の一年

183

三年めの春

184

武豊、オグリキャップに乗る

189

故障と連敗と

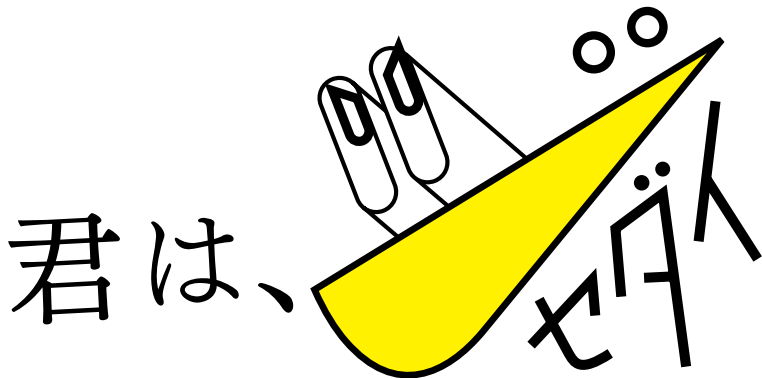
197

第八章 ラストラン 207

終章 それからのオグリキャップ 221

おわりに 232

おもな参考文献・資料 235



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!